

四 觸耳觸目みな法縁

信の上は何彼につけて喜ばれると蓮如上人は仰せられた。佛法には、萬かなしきにも、かなはぬにつけても、何事につけても、後生たすかるべきことを思へよ、よろこび多きは佛恩なり」。目に觸れ耳に聞ゆるもの、順縁逆縁共に、歡喜感謝の種ならざるはないのである。

或人、香樹院師の許に詣り、御話を承はつて自督を述ぶ。師、一言に叱咤して「地獄に墮つること必定」と。「さては有難や、かねて聞く、我罪重くして、十方三世の諸佛も力かなはず、捨てたまひしとや。今また日本一の御講師様より、地獄必定との仰、すれば私は屹と墮ちるに相違ない、其者を墮とさぬぞとお呼び下さるお慈悲尊や、何としてか御禮を申しませうぞ」と却つて之を縁に喜んだとある。

また、或同行は、大病になやめる友を訪うて、人を拂ひ竊に云ふには「近頃、君に悪い評判がある、氣の毒の事、夜なく當家に鬼が火の車を走らして來るとか、君の御安心も覺束ないことぢや」。「フンそれは私が地獄に墮ちる前相ぢや。私は悪人、私が墮ちないで誰が墮ちやう、かゝる者を助け給ふ本願、いよく尊い有難い」と、却つて限りなく喜ぶ。同行は喜んで、「赦して下さい、これは私の計略だ、君の安心金剛の如し、誠に安心した」と。はては互に手をとつて打ち喜び、友はその厚情の深き事を謝したと云ふ。人の怒り出す處を怒らぬ、直に法義に引きよせて、身の仕合せを喜ぶ、眞に奥ゆかしい心掛ではありませぬか。

九州に誠に法義を喜ぶお婆さんがあつた。固より目に一丁字なく、文字と云つたら、いろはのいの字も知らぬ程である。祖先の法事に、旦那寺を招待して、お三部經を讀んで貰ふ。所でその『無量壽經』の初に、尊者了本際、尊

者正願、尊者正語などと、尊者々々が澤山に續いてある。婆さんそれを聞いてホロリく涙をこぼして喜んでござる。あとで「婆さん何がそんなに嬉しかったかへ」ときけば、婆さん眞面目になつて、「これが喜ばずに居られやうかい、お経にて讀まれるのを聴聞すれば、損ぢやくと何遍もくも仰しやう、阿彌陀様は私を助けやうために、あれほどまで損をなされたかと思へば、勿體なうて有難うて、何とも云はれぬ事であつた」といふ。「婆さんそれは違ふ、尊者々々つてあれは、損をせられたといふのではない。「フンさうかへわしはまた損をなされたのかと思ふた」。「あれはのう、尊いお方と云ふことで、このお経を聴聞せられた尊いお方々のお名前が、澤山と列べてあるのぢや」。「あらマアほんにさうかい、勿體ない、そんなに數澤山な尊いお方々がよつてたかつて、しぶとい此私を法義に引入れて、今の仕合せな者に、育て上げて下されましたか、御勿體ない……」、また喜んで居る。

ほんに婆さん仕合者ではありませんか。目に見るもの耳にきくもの、すべて御慈悲よろこぶ御縁になつて居る。「萬事につきて、よき事を思ひ付けるは御恩なり、悪きことだに思ひ捨てたるは御恩なり、捨つるも、取るも、何れもく御恩なり」正に御恩の日暮をなすべきである。